

永野芳夫のデューイ研究と 澤柳政太郎の成城小学校教育実践との関連性（上）

—「経験哲学」にもとづく「新しい教育の諸事実」の「基礎づけ」に焦点をあてて—

米澤正雄

本論文の論構成

- I. はじめに
 - II. 永野芳夫におけるデューイ研究の経緯と問題意識（長田新・澤柳政太郎との関係を中心に）
 - III. 成城小学校教育実践の前提にある澤柳政太郎の教育思想とその「実験」としての成城小学校小学校教育実践
 - (1) 成城小学校創設以前の澤柳の教育思想（『教師及校長論』にもとづいた、「発達」概念を中核とする『実際的教育学』・『学修法』）
 - (2) 成城小学校教育実践を成立させた、澤柳における「発達」概念から「発育」概念への再構成と永野原稿「デューウィ教育学説の研究」（特に、デューウィ「生長」概念）の影響
 - (3) 木下竹次『学習原論』、手塚岸衛『自由教育真義』（篠原助市「批判的教育学」に依拠する）、における「発達」概念欠如とこの欠如への理論的・実践的対応
- （以上、本号に掲載。以下、次号に掲載予定。）
- IV. 永野における、「経験哲学」（「デューイの哲学」を中心とする）にもとづく「新しい教育の諸事実」の「基礎づけ」のありよう
 - V. 澤柳没後、戦中の永野の研究と戦後におけるデューイ研究再興

I. はじめに

本論文の課題は、大正時代から昭和初期にかけての永野芳夫（1894-1967）のデューイ研究と澤柳政太郎（1865-1927）の成城小学校（1917年4月創立）教育実践との関連性を、永野における「経験哲学」（「デューイの哲学」を中心とする）にもとづく「新しい教育の諸事実」の「基礎づけ」のありように焦点をあてて、究明することにある。

この時期の永野のデューイ研究をとりあげるのは、永野のデューイ研究三部作（『ジョン・デューウィ教育学説の研究』1920年10月、『ジョンデューイ哲学説の研究』1922年6月、『ジョン・デューイ論理学説の研究』1926年4月、いずれも、大同館書店、以下、それぞれ、『デューウィ教育学説の研究』、『デューイ哲学説の研究』、『デューイ論理学説の研究』と表記）が、当時の日本国内のデューイ研究は言うに及ばず、同時代の英米のデューイ研究に照らしてみても、比較するものがないほど群を抜いているからである⁽¹⁾。にもかかわらず、今日に至るまで、永野のデューイ研究についての先行研究は皆無だからである。このことは、戦前の日本におけるデューイ研究のありようについて、従来の我々の認識に大きな盲点があることを物語っている。

そして、永野芳夫のデューイ研究の解明に際して澤柳政太郎および澤柳の指導する成城小学校教育実践との関連性を問うのは、まず第一に、永野が成城小学校「教育問題研究会」の機関紙『教育問題研究』（1920年4月1日、第1号創刊

～1928年3月1日、第96号終刊)に、第4号(1920年7月1日、論文「労役としての教育を救へ——デューウィの思想を背景として日本に於ける教育の改造を論ずる、其一——」)から第51号(1924年6月1日、論文「国字をローマ字にしてそれからエスペラントへ」)まで、計18編の論文(うち、デューイ『学校と社会』第1章の翻訳2編を含む)⁽²⁾を寄稿しているからである(このことについての先行研究も、もちろん皆無である)。しかも第二に、永野は初期成城小学校の訓導、佐藤武とともに、当時の「新学校」17校(千葉県師範学校附属小学校、奈良女子高等師範学校附属小学校、を含む)を訪問して、『改造思潮に基ける新学校の主張と其実際』三共出版社、1923年、を著しているからである。そしてそれ故、永野のデューイ研究と澤柳の指導する成城小学校教育実践との関連性を解明することによって、従来の、大正自由教育におけるデューイ思想受容について、篠原助市のデューイ思想受容(特に、『批判的教育学の問題』1922年、所収の論文「デューイの教育論」)を相対化する、新たな知見が得られると考えられるからである。

永野は、澤柳の成城小学校教育実践への関与を通して、この成城小学校教育実践に典型的に示される、「新しい教育の諸事実(いなあらゆる生活の諸事実)に基礎づけをする哲学は経験哲学[この著作の論述内容の中心が第四章「デューイの哲学説概説」であるので、特に「デューイの哲学」を指す]であらねばならぬ⁽³⁾」との問題意識にもとづいて自らのデューイ研究を遂行し、これを踏まえて同時代の教育状況に対して果敢に挑んでいる。以下、永野のデューイ研究のありようを、澤柳の成城小学校教育実践への永野自身の関与との関連において解明し、永野が、自らの「経験哲学」(「デューイの哲学」を中心とする)にもとづいて、同時代の「新しい教育の諸事実」をいかに「基礎づけ」ようにしたのか、考察してみよう。

Ⅱ. 永野におけるデューイ研究の経緯と問題意識(長田新・澤柳政太郎との関係を中心に)

永野芳夫は、1894(明治27、以下「明27」と略記)年大分県に生まれ、1910(明43)年4月大分県師範学校に入学し、1915(大正4、以下「大4」と略記)年3月同師範学校を卒業する。同師範学校「付属小学校訓導に任ぜられたが、志をたてて同[1915]年東京高等師範学校文科第三部に入学し、1919[年3月]同校を卒業、和歌山[県]師範学校に[教諭として]赴任した。しかし、向学の念をおさえることができず、翌年[9月]同師範学校を退職し]再び上京して、東京帝国大学文学部哲学科に入学、1923[年3月]卒業。宗教大学教授となり、同時に東京帝大大学院に[1927年4月まで]4年間学んだ。1926[年4月]宗教大が大正大学に発展するにともなって同大学教授[[講師]の誤り、担当学科は「西洋哲学」・「論理」、「専任」]「昭和15年3月31日解任同日学部、予科、専門仏教科、高等師範科講師嘱託、]とな」ったが、「東京帝大では官立大学でただ1人英米哲学を講じた大島正徳に学び、大学院の研究主題には「理性論と経験論の交渉」を選んで、「デューイ論理学研究」「デューイ倫理学研究」を報告論文として提出した。永野はその頃すでに著作活動を開始しており、前記の報告論文をはじめ、デューイ哲学の諸領域にわたる研究書を次々に公刊し、稿を改めて再刊して、倦むことがなかった⁽⁴⁾(〔 〕内は引用者の補足、以下同様とする。尚、以下において、「東京高等師範学校」・「大分県師範学校」を、それぞれ、「東京高師」「大分師範」と略記する。その他の高等師範学校・師範学校の表記も同様に略記することとする)、と言われる。あらためて、永野がデューイ研究にのめり込む経緯と問題意識を探ってみよう。

永野は、既に東京高師在学中、雑誌『教育学術界』に、1918(大7)年10月1日から翌1919(大8)年2月1日—デューイが来日し東京帝国大学で8回の連続講義(1919年2月25、28日、3月4、7、11、14、18、21日)を行なう、ほ

ば1ヵ月前—にかけて、副題に「デュウキイ氏教育説の研究」と題する4編の論文を掲載している。そして永野はこの翌1920(大9)年、東京高師卒業後に赴任した和歌山師範在職中に、澤柳政太郎の指導する成城小学校「教育問題研究会」の機関誌『教育問題研究』に、「デュウキイの思想を背景として日本に於ける教育の改造を論ずる」との副題を有する連続論文3編を既に寄稿している⁽⁵⁾。さらに、同1920年10月には、自らの最初のデューイ研究書、『デュウキイ・デューウイ教育学説の研究』大同館書店、を出版するに至る。

デューイの来日と連続講演が、永野のデューイ研究に対して大きな刺激を与えたであろうことは容易に推測できる。しかし、永野はそれ以前からデューイに関する論文4編を著している。デューイ来日以前に、東京高師在学中の永野が「デュウキイ氏教育説の研究」を志したきっかけは何か？ また、この頃の永野のデューイ研究について指導・助言していたのは誰か？ そして、東京高師卒業後、和歌山師範に教諭として勤務している永野が、いかにして、澤柳の指導する成城小学校「教育問題研究会」の機関誌に、「デュウキイの思想」にもとづいた「日本に於ける教育の改造」論を掲載することができたのか？ しかもその上、東京帝国大学文学部哲学科への入学時に、永野が自らの最初のデューイ研究書、『デュウキイ教育学説の研究』までも出版しえたのは、いかにしてか？

まず、デューイ来日以前に、永野がデューイ研究を志したきっかけは、デューイの *Democracy and Education* (1916) との出会いである。そして永野が『デュウキイ教育学説の研究』を出版できたのは、長田新(1887-1961)の指導と長田および澤柳政太郎の尽力によってである。『デュウキイの教育学』(中和書院、1937年)の「はしがき」において、永野はこう述べている。

「約二十年まえ [1917年頃] にきわめて偶然な動機からデューイの *Democracy and Education* を持つことになった。別にデュー

イの名を知って求めたのでもなかったが、当時は [東京高師文科第三部において] ただ語学を勉強していた私も、やがてはこれを方便につかて、哲学一般の研究をしたいところだったので、とにかく第一頁から読みはじめてみると、そのころききなれていた学校の講義の思想とは、その方法も内容もちがって、むずかしいがしかしまことにおもしろく、知らず知らずに、これに深入りすることになった… [略] … / やがてまもなくその著者デューイは日本にやて来て、そして東京帝国大学で、八回にわたる公開講演 [1919(大正8)年2/25, 2/28, 3/4, 3/7, 3/11, 3/14, 3/18, 3/21] をした。それをきいた私は、そしてまた [東京高師の] 友枝高彦先生につれられて彼をその宿所(ニトベ博士邸)に訪ねたりした私は、手のとどくかぎり彼の著作を耽読することとなった。 / まもなく長田新先生澤柳政太郎先生のお世話で、「デューイ教育学説の研究」が、私の処女著作として世に出ることになり、つづいて「デューイ哲学説の研究」「デューイ論理学説の研究」も出版されたのであった。⁽⁶⁾」

では、デューイの *Democracy and Education* と永野との出会い(1917年頃)を導いて、永野に、当初「デュウキイ氏教育説の研究」の論文執筆を、そして『デュウキイ教育学説の研究』——永野自身によれば「この書の叙述の系統は半分は *Democracy and Education* に依る⁽⁷⁾」——の原稿執筆を指導・助言したのは誰か。長田新である。この著作の「はしがき」冒頭に、永野はこう述べている。

「この研究を私に暗示して下されまた途中で幾回か鞭撻して下された長田(新)先生、この稿を通じて数回読んで下され、かつ有益なご注意まで下された長田先生。 / 私はただ先生に感謝いたします。… [略] …ただ、この書が形づけられたに際して、ただ先生に感謝いたします⁽⁸⁾。」

永野は、*Democracy and Education* との出会いで当初感じたこと(「むずかしいがまことにおもしろ」い)を、長田の指導(「暗示」と

「鞭撻」, 草稿の下読み, 「有益な」「注意」等) によって、『デューウィ教育学説の研究』へと「形づけられた」, と述べる。なぜ長田が、永野に対してその処女作の産婆役を果たしたかといえは、永野は、大分師範における長田の教え子のひとりだからである。永野の長田との出会いは、広島高師を卒業した長田が大分師範に着任した1910(明治43)年4月に、永野が大分師範に入学したことに始まる。大分師範における長田の在職期間は、京都帝国大学(文学部哲学科)への長田の進学のため僅か2年半にすぎないが、永野が大分師範卒業後、東京高師に進学する1915(大正4)年、長田も京都帝国大学を卒業し(同1915年7月)、澤柳政太郎の「秘書」を勤めるため上京、東京で生活する(同1915年9月から、長田が母校広島高師範の専任講師として広島に戻るようになる1919年11月末まで)。そして長田は、1918年から成城小学校「研究顧問」を兼ねるようになる。永野が東京高師に進学し(在学期間は1915年~1919年3月)、デューイの *Democracy and Education* に出会い、指導・助言を仰ぐようになる当の長田は、澤柳および成城小学校との関係において、このような役割を果たしつつあったのである⁽⁹⁾。

長田は、永野の『デューウィ教育学説の研究』の原稿執筆を指導しただけではない。澤柳に推薦して永野の原稿を見てもらい、その出版に尽力してもらうのである。『デューウィ教育学説の研究』の原稿が出版に至る経緯について、永野は、自らの学位論文の出版、『デューイ教育思想の基本原理解』春秋社、1950年、の「はしがき」にこう述べる。

「この書は、私の《デューイ研究》八卷[中和書院版]の一つの総合であるがゆえに、その中からのそのままの文章がこの書の諸所にあります。デューイ研究の第一巻『デューイ教育学説の研究(すなわち後の[中和書院版]『デューイの教育学総論』)は大正八年私が和歌山県師範学校在職中に書かれました。私はこの原稿をもって広島に[1919(大正8)年11月30日付で母校広島高等師範学校に講師

として赴任し(翌年6月21日付で同高等師範学校教授に昇任し)ていた]長田先生をたづね、先生の紹介で京都に小西重直先生をたづね、そしてまた長田先生の紹介で澤柳政太郎先生をたづねました。そしてこの原稿は長田先生と澤柳先生とのお世話で大同館から出版されることになり、その印税は私の東京帝国大学における勉学の費用を大いにたすけてくれました。以来澤柳先生からも多くの指導を受けました。この澤柳先生——がその昔の教育界の大御所であり、そして新教育運動の先端にたつ指導者であった澤柳先生が——この第二の新教育時代になお生きてあられたならば、この国のためにはかりしれぬほどの良き影響があるであろうと、しのばれます。私は、この意味において、この書を先生の霊にささげようと思います。/(1950年2月27日 永野芳夫)⁽¹⁰⁾」

このように、永野の『デューウィ教育学説の研究』の原稿は、澤柳への長田の推薦と澤柳による出版社の斡旋によって、出版に至るのである。しかし、長田の紹介によって永野の原稿を読んだ澤柳は、その原稿の出版以外にもうひとつ、永野への手立てを講じている。『新教育の方法論』(中和書院、1949年、本書は、『教育改造の原理』大同館書店、1921年、に序章を加え、若干の用語修正を施して戦後再刊したもの)において、永野は言う。

「およそ30年もまえに日本には新教育の時代があった。そしてその時代の開幕のベルをおしたのは、……澤柳政太郎博士であった。この書の書かれる発端の機縁は、その澤柳先生から、(そのころ先生が校長であり、小原國芳氏が主事であり、小西重直博士と長田新氏が顧問であった東京牛込の成城小学校の機関雑誌、『教育問題研究』に、)デューイの教育思想の紹介的論文をかけ、といわれたところにある。というのも、この書の第一章第一節の「労役としての教育を救う」がそれに応えた論文であったからである。(論中には、しかしデューイの名はいちども出ない。)こ

の論文をきっかけにして、私は私の若さにまかせて、かなり自由放胆な教育改造論をかきあげて、これを「教育再構成〔教育改造〕の原理」として世に出した⁽¹¹⁾。」

澤柳は、永野の原稿に眼を通し、出版社を自ら斡旋するだけでなく、当時創刊したばかりの成城小学校「教育問題研究会」の機関誌、『教育問題研究』に、「デューイの教育思想について、紹介的論文を書け」と永野に要請するのである。だから永野は、自らの『デューウィ教育学説の研究』大同館書店、1920年10月、の出版される3カ月前から、『教育問題研究』に連続して論文を寄稿し、これを纏めて『教育改造の原理』大同館書店、1921(大正10)年4月、として出版することができたのである。

以上、永野のデューイ研究の当初の経緯を示した。澤柳の指導する成城小学校教育実践との関係において述べるならば、第一作『デューウィ教育学説の研究』の出版後、永野が、自らのデューイ研究を第二作『デューイ哲学説の研究』1922年6月、第三作『デューイ論理学説の研究』1926年4月、へと展開する過程は、同時代の教育状況への永野自身の問題意識が、澤柳の指導する成城小学校教育実践への永野の関与の継続によって深められ、永野自身による「デューウィの思想を背景」とする「日本における教育の改造」論が展開する過程(『教育改造の原理』から『改造思潮に基ける新学校の主張と実際』1923年8月、へ、そして『経験哲学を基礎としての新しい教育論』1924年7月、へ)でもある。このことは、次のことからいえる。すなわち、永野のデューイ研究第一作『デューウィ教育学説の研究』「はしがき」において、「長田新、澤柳政太郎、友枝高彦、土田杏村⁽¹²⁾」に謝辞が述べられているのに対して、第二作『デューイ哲学説の研究』の献辞は「Sawayanagi Masatarō Sensei/Osada Arata Sensei/Kuwaki Genyoku Sensei/Tom eda Takahiko Sensei/Konishi Jūchoku Sensei⁽¹³⁾」の5名に捧げられ、うち、上位2名の澤柳・長田と最後の小西、計3名は、成城小学校教育実践の指導

者トリオである、ということである。このことは、永野のデューイ研究第二作において、成城小学校教育実践への永野自身の関与の比重が、いかに重くなっているかを示すものである。『デューウィ教育学説の研究』「はしがき」謝辞において「私の中のデューイが〔澤柳〕先生に似ていることを、私は(勝手に)自分で認めます。(その無礼はお許し下さい。)⁽¹⁴⁾」と当初述べていた永野が、4年弱後の『経験哲学を基礎としての新しい教育論』において、「新しい教育の諸事実(いなあらゆる生活の諸事実)に基礎づけをする哲学は経験哲学であらねばならぬ」と自らの立脚点を宣言するに至ることも、これと軌を一にしていると考える。次節では、永野における、「経験哲学」にもとづいた「新しい教育の諸事実」の「基礎づけ」のありようを解明する前提として、永野が「新しい教育の諸事実」の典型とみなした、成城小学校教育実践の前提にある澤柳政太郎の教育思想を、手塚岸衛の『自由教育真義』(1922年)および木下竹次の『学習原論』(1923年)と対比しつつ概観してみよう。

尚、次節における澤柳の教育思想(成城小学校教育実践の前提にある)の検討は、当初の永野が澤柳に見ていた、「私の中のデューイが〔澤柳〕先生に似ている」とはどのようなことを指すのか、に留意して行なうことにする。また他方、澤柳が、永野の原稿をどのように評価したが故に、『教育問題研究』への「デューイの教育思想について」の「紹介的論文」の執筆を永野に要請したのか? に関しても留意して、検討を行なうことにする。特に、次に示す、永野の『デューウィ教育学説の研究』への澤柳の評価を示した論文「デューウィ教育學説の研究を読む」[『教育問題研究』第11号、1921(大10)年2月]の第「七」節(特に第一段落の最初のふたつの文)の意味の解明に留意して、検討を行ないたい。

「私共の成城小学校はデューウィの意見によりて提擧されたものではないが、教育上の見当は大体一致していることを本書によりて

明にするを得て心強く、我が成城校の教育に基礎づけられた感を禁ぜざるを得ない。殊に教授と其令嬢の共著なる「明日の学校」中の或る記述のごとき恰も我が成城小学校の状況をありのままの記して居らるるかと思わるる節あるを見て有力なる裏書き人を得たるを思わざるをえない。かかる次第でいうのではなく、本書は近來の理想的教育学書中他に類を見ざる有益の書であると思う。繰り返して云うが、本書は現代一流の哲学者の思想を叙述したものであり、著者はデューウィの学説を十分に咀嚼し消化して論述したものである。近來得難き良書として推奨するのはこの故である。／終わりに形式的のことであるが、本書には可なり詳しい索引がついている。外国では極単簡の書物を除いては索引のないものはない。之に反して我が国では索引のある書物は極めて稀である。これは一大欠陥である。本書の如きは私は巻首から巻尾まで精読せられんことを希望するものであるが、時々参考する為には索引のあるのは非常に便宜である。この点に於いても著者の労を多とする。⁽¹⁵⁾

Ⅲ. 成城小学校教育実践の前提にある澤柳の教育思想とその「実験」としての成城小学校教育実践

(1) 成城小学校創設以前の澤柳の教育思想
 (『教師及校長論』にもとづいた、「発達」概念を中核とする『實際的教育学』・『学修法』)

成城小学校創設以前の澤柳の教育思想は、教師論にもとづいて、「発達」概念を中核とする教育(学)論と「学修」論とが表裏一体の関係でその上に位置づく、という構造をなしている。ここでは、提示された古い順に、まず、澤柳の教師論として『教師及校長論』(1908年)を、次に「被教育者の側からみた」教育学としての「学修」論『学修法』(1908年)を、最後に教師の教育(学)論として『實際的教育学』をとりあげ、『實際的教育学』が「実験」に移され

る際に、澤柳の教育思想の「発達」概念が「発育」概念へと移行することによって、成城小学校の教育実践が可能になっていることを示そう。

『實際的教育学』において、「教育の作用は教師の働である。その働は、教師の精神より湧き出づるものでなければならぬ⁽¹⁶⁾」と言う。「教育の作用」の要諦は、つまるところ、「教師の精神」にある、ということになる。澤柳にとって、この「教師の精神」を構成する不可欠の要因は二つある。ひとつは、教師が、自ら教育を行なうに際して、ペスタロッチのような、「誠実と熱心」を有することである。

「[ペスタロッチ]曾て教育の学を修めしことなく、先輩の啓発に依れるなし、而して世界の大教育者となれるは何故ぞや、曰く教育者のたるの精神を有せしに依るのみ豈他あらんや。苟も彼の誠実と熱心とだにあらば皆もつてペスタロッチたるを得べし。吾人何ぞ奮勵せざるべけんや⁽¹⁷⁾。」

もうひとつは、教師が、教室における自らの教育実践を「実験」とみなし、日々の自らの「実験」結果を把握してその改善に努めることである。

「教師が教室に於いて児童生徒を教育するは恰も理化の学者が実験室にあるようなものである。注意深き教師の観察眼には様々の反応や現象の変化が映るのである。…[略]…教育は実験的のものであって我国の教育学者は大いに教育の實際を観察し、教育者は日々この実験を為しつゝあるものであるから教育の進歩改良はこの結果として現れなければならぬ…[略]…しかるに今日の教師の多くはこの貴重なる実験を為しつゝ、その結果を空しくして居る。甚だ残念に堪えない。…[略]…日々自身の経験から学ぶことを忘れてはならぬ。どうぞ日々得られる沢山の材料を充分利用するようにしたい。教師は学生である。実験しつつあるものである、日々研究しつつあるものであるということを実現したい。…[略]…／…[略]…余は…[略]…教室を以て直に実験室となす、その実験教

育学の大きい唱導されんことを希望する⁽¹⁸⁾。』
澤柳は、教師が、ペスタロッチのような教育への「誠実と熱心」をもって教育に取組み、自らの教育実践を「実験」とみなして、子どもたちへの日々の自らの働きかけを反省し改善していくならば、必ずや、次のような「教育の快樂」が教師に得られるであろうと言う。

「英才を得てこれを教育するは天下の快樂。たとえ英才ならずとも子弟を教育するは一大快樂である。一草一木の変化発達を見るもの一快樂、まして自己の力に依りて子弟の発達進歩するを見るは大なる快樂である。我は天地の化育を助くるのである、我は人を善に導き人の知を開くものであると自覚したならば快樂感せずして居ることは出来ない⁽¹⁹⁾。』

ここには、「教育する」とは、「子弟の発達進歩する」のを教師が「助くる」ことである、との澤柳の教育観(教育の「発達」観)が伺える。澤柳のこの「発達」概念こそ、成城小学校創設以前の彼の教育思想の、鍵概念である。『實際的教育学』において、「教育」はこう規定されている。

「教育は発達である。変化である。被教育者の心身に及ぼすところの変化である。その心身の上に現れる所の発達である。この変化発達が即ち教育の事業そのものである⁽²⁰⁾。』

『實際的教育学』は、この、教育の「発達」観にもとづいて、「教育の事実」(特に「学校教育中の普通教育」)に関し、従来の教育学においてほとんど論及されてこなかった「教育学上研究すべき問題を列挙したもの」である。言い換えると、「此の問題を解決する為には、自己の想像や学者の著述を研究した結果に依って為すことは出来ない、必ず教育の実際に当って種々の実験を重ねた上でなければ結論を下すことができないのである。結論を下さないのが私の著述の特色であると言っても宜い⁽²¹⁾」と澤柳は考えているのである。

澤柳の考える「教育学上研究すべき問題」とは、例えば、教育の目的について、「教育の目的は階級的に定むべきものであって、固定的に

定むべきものではなかろうか⁽²²⁾」、ということである。なぜならば、教育の目的として、たとえば、「道徳的生活の完成」掲げた場合、これは人間が一生かかっても到達できる保証はない、言い換えると教育がいつ終了するか少しも明白にならない、からである。それよりは、小学校なら小学校の(もっと言えば、小学校1年なら1年の、2年なら2年の、……等々)、中学校なら中学校の、教育の目的を、教育学研究者は、教育の法令に定められている目的とは別に、具体的にとりあげ、論及・考察すべきであるからである。

同様に、教師が教育実践を行なう場合、子どもの「発達」についても、次のような研究課題を澤柳は提示している。

「教育の当体である所の児童及び青年は精神の発達が最も迅速なる時機にあるものである。これを研究するに当っては専らその発達に注意してなされなければならぬのである。… [略] …教育上ではもっと大体のことでもよい、六七歳から十二三歳に至るまでの精神の発達を知りたいのである⁽²³⁾。』

『實際的教育学』において澤柳がこのような研究課題を提示したのは、これらの研究課題の解決に際して、「必ず教育の実際に当って種々の実験を重ねた上で」「結論を下す」べきである、と考えているからである。なぜならば、『實際的教育学』における、学校教育(特に普通教育)での教育実践上のこのような諸問題の提示は、従来の教育学の「空漠」性、「実際との没交渉」性、への代案提示である限り、その当該「問題」について「種々の実験を重ね」ることが、既に想定されているからである。

「ここに一人あって一の学校を設立する。其学校の目的は教育学の論定する所に依って定める。その学校の学科も教育学の論定する所によって定めると云うが如き場合があったならば、ここに初めて教育学が実際と関係を生ずることになるであろうと思う⁽²⁴⁾。』

との言は、未だ「実際と没交渉」である澤柳自身の『實際的教育学』にも適用され、『實際的

教育学』に提示された研究諸問題の、「実験」を通した解決がはかられることを予定しているからである。『実際的教育学』に提示されたこのような研究諸問題を、教師自身が自らの「実験」を通して解決するために澤柳によって創設されたのが、成城小学校にほかならないのである。

しかし、未だ「実際と没交渉」である澤柳の『実際的教育学』に提示された研究諸問題を、教師自身の「実験」を通して解決するためには、まず、澤柳自身が超えなければならないハードルがある。それは、澤柳が、自らの『実際的教育学』の研究対象として限定した「学校教育」(特に普通教育)の中核をなす、小学校に通う子どもの「六七歳から十二三歳に至る精神の発達」について、「教育上ではもっと大体のこともよい」「知りたいものである」との願望表明しかできていないことである。このことは、『実際的教育学』と対をなす澤柳の『学修法』に問題点として如実に示されている。

澤柳によれば、「学修法は真の教育学の一半」であり、「被教育者の側より見たる教育学」である。それは「主として学校において教育を受けつつある者に対して、如何に教育を受くべきか、教師の教育上の働きに対して、学生は如何に働くべきかを論及せんとするもの」である⁽²⁵⁾。なぜ、この「学修法」が教育学に不可欠かといえ、教育は必ず学修を伴うべきもの」だからである。言い換えると、「知育、徳育に於いても体育と同じく、[生徒・学生の]自発的奮励と教師の教育的作用と相須つにあらざれば、其目的を達することはできない」からである⁽²⁶⁾。要するに、「学修法は主として被教育者の自発的奮励を論ずる者である。故に小学校児童の如き、尚受動的態度にある者については適用することはできない⁽²⁷⁾。」従って、「学修法の第一の原則は学生たるものは自発的奮励をなすべしと云うにある」ほかはなく、「如何にして自発的奮励を為すことが出来るか。既に自発的と云う以上は、他に方法を待つべきものではない。… [略] …学生たる者自発的

奮励をなすべしと云う外に、如何にして自発的奮励を起こすかと云うことは説き難いことである⁽²⁸⁾。」との堂々巡りしかない。成城小学校創設を視野に入れると、ここで澤柳に問われているのは、「小学校児童」に対して適用することができない、彼自身の「発達」概念である。「凡て発達成長は必ず自発的の要素を取らなければならぬものである。… [略] …内部よりの発展するものにあらざれば、成長発達と云うことは出来ないのである。… [略] …内部より自発的に奮励するにあらざれば発達をみることはできないのである。」つまり、澤柳は、「発達」には「発達」主体の「自発的」「奮励」が必要不可欠であると見ているにもかかわらず、「被教育者」に「自発的奮励」を要請する「学修法」の適用対象を澤柳自身が主として青年期(生徒・学生)にのみ狭く限定しているために、「小学校児童の如き、尚受動的態度にある者については適用できない⁽²⁹⁾」という帰結を自ら手にしているのである。『実際的教育学』に提示した研究上の諸問題を、「六七歳から十二三歳の精神の発達」を問題にせざるをえない、小学校の教育実践レベルでの「実験」において究明するためには、「自発的奮励」を基準にして成立している、青年期中心の澤柳の「発達」概念が、「小学校児童」、すなわち「六七歳から十二三歳の精神発達」を含み、これと接続するように、再構成される必要があるのである。

(2) 成城小学校教育実践を成立させた、澤柳における「発達」概念から「発育」概念への再構成と永野原稿「デューイ教育学説の研究」の影響

澤柳は、自らの「発達」概念を「発育」概念へと再構成することによって、ハードルを乗り越える。

「遺伝と環境との交渉によりて起こる現象は発育である、生長である、発達である。教育も発育である、生長である、発達である。教育は開発的なるべしとは少しく根本的に云えば発育的なるべし、生長的なるべし、発達

的なるべしということになると思う。／既に発育といい生長という以上、教育という事柄は主として各児童の内に含まれている遺伝性が内から発育することである。その発育は環境の作用をまつは云うまでもないが、環境……教育は其の一……は内より発育を助ける外縁に過ぎない。農作に於て肥料を施すという、なるほど農夫が肥料を施すには相違ないが、肥料を吸収する力は農夫の如何ともすることの出来ないことで植物それ自身の力である。しかも其の吸収される肥料も全く形を換えて始めて発育の要素となるのである。私共は教育を施すという其の意味は恰も肥料を施すという意味と大体同じである。教育者の施す教育は児童の内部よりの発育を助けるに過ぎない、児童自身の力で摂取せられてはじめて発育の要素となるのである。即ち児童が内から発育せんとする時期を見計って教育を施さねばならぬ。そこで就学の始期は何時であるかが最も大切な問題となる。児童自身の力で摂取せんとする時期にその要求するものを提供するようにせねばならぬ⁽³⁰⁾。」

澤柳はここで、「発育」(「生長」・「発達」と同義で使用)を「遺伝と環境との交渉によりて起こる現象」と規定する。そして「教育」を「発育」・「生長」とみなすことは、農作において作物に肥料を施すことと「大体同じ」である、と言う。言い換えると「教育」は、「発育」をもたらす「環境の作用の一」として、「各児童の内に含まれている遺伝性が内から発育すること」を「教育者」が「助ける」作用である。この場合、「教育者」側の助成作用は、「児童自身の力で摂取せられて始めて発育の要素となる」、と澤柳はみなす。澤柳は、『実際の教育学』および『学修法』において自ら用いている「発達」概念を、「遺伝と環境との交渉」の文脈におき直すことによって「生長」と同義の「発育」概念へと再構成し、それまでの「発達」概念の成立基準である「自発的奮励」も、同様に、「環境の作用」を「児童自身の力」によって「摂取」すること、へと再構成する。そしてこの概念の

再構成によって、澤柳は、「発達」概念の成立基準である「自発的奮励」によっては対象外として排除されていた「小学校児童の如き、尚受動的態度にある者」の認識を改め、「児童自身」が「環境の作用」(教師の行なう「教育」は「其一」)を「摂取」する「力」を本来的に有する存在であることを認めるに至る。今や澤柳は、それまでの「自発的奮励」によっては青年期(「生徒・学生」)にしか適用できなかつた自らの「学修法」を再構成し、児童期における「自学自習法の建設にまで」⁽³¹⁾をも問いうる地平に立つのである。このような概念再構成によって、澤柳は、すでに『実際の教育学』に提示していた研究上の諸問題を、「実験」、つまり成城小学校教育実践によって、究明する道を切り開く。澤柳の教育思想におけるこの「発達」概念から「発育」概念への再構成は、成城小学校教育実践の共通の問題が、「就学の始期は何時か」——「児童自身の力で摂取せんとする時期に其の要求するものを提供する」には教師はいかにすべきか——として成立することを告げるものなのである。

何が澤柳をして、この「発達」概念から「発育」概念への再構成へと駆り立てたのか？ 澤柳が、「芸術的天分」に富む長男勇太郎を、「医科」を志望する「無理な試験勉強」によって二十歳前に失った⁽³²⁾(1910年6月20日)痛恨の念から、論文「教室内の教授をして快活ならしむる方法如何」⁽³³⁾(1912年10月15日)において中等教育のありかたを抜本的に反省し、「発達」概念と同義で「発育」概念を既に用い出していたこと。そして澤柳が、1917年4月に成城小学校を創設し、成城小学校教育実践を下支える概念として「発達」よりも「発育」概念に比重をかけて使用しつつあった状態で、永野芳夫の『デューウィ教育学説の研究』の原稿を読み(母校広島高師の専任講師として広島に着任した長田に、和歌山師範に赴任していた永野が原稿を持参して指導を受けに参上することが可能になる1919年11月以降、長田の推薦で同原稿についての澤柳の意見を伺うために上京して『教

育問題研究』に寄稿するよう言われ、その最初の論文が同雑誌に掲載された1920年7月1日までの間)、そこに説明されているデューイの「生長 (growth)」概念に、まさに我が意を得たり、との感を深くした。これら二つのことによる、と私は考える。永野は言う。

「生長の第一条件は未成熟である。… [略] …未成熟をば単なる欠乏である、空虚であるとするのは幼き者自身の未成熟をば成人という外的な標準に依って、評価することから来る誤りである。… [略] …未成熟はどこまでも積極的な能力である、生長する力である、生長しようとする力である、自ら進もうとする力である。… [略] …生長とは、幼き者に他から成されたものではない。それは幼きものの為すものである⁽³⁴⁾。」

澤柳において、「発育」が「環境」との関わりにおいて、「生長」と同義で用いられることはその証である。

念のため、「発達」概念に依拠した『学修法』における澤柳の、欠如としての「未成熟」理解の用例を示しておく。

「学修は自己が未成熟だからである。既に成熟して居たなら学修する必要はない。… [略] …成熟しないということを他の方面から云えば学生は不完全である。… [略] …学生の知識は未だ十分でない、その知る所は少ない、或いはその考えは間違っているということである。これ事実である、学生はかく自覚するが当然である。又かく自覚して始めて学生の本分が尽くせる。学生で知らないのは恥でない、知ろうとしないのが恥である。… [略] …道徳上のことも同様で、学生はその品性がまだ琢磨されない、訓練されない。それ故に教育を受けて徳性の涵養をはかるのである。… [略] …要するに学修は不完全であるから為すのである。未だ発達しないから学修するのである。学生たるものはこの事を自覚しなければ学生の自覚がないものである。智力上にも道徳上にも自己の不完全を自覚するのが学生たるの自覚あるものである。

この自覚はやがて完全に導く原動力となるものである⁽³⁵⁾。」

また、永野の原稿を読む以前の澤柳において、「発達」が「発育」へとスライドしていく用例を、論文「教室内の教授をして快活ならしむる方法如何」から示しておこう。

「教室の授業をして快活ならしむる手段は、授業が能く生徒の精神の発達に応じて無理のなき授業をなすと云うことである。… [略] …併しながら能く実際に就いて考えて見ると、決して今日の教育は無理のない生徒の心的発達に適應した教育がほどこされつつあると云うことは言えないのである。… [略] …何故に斯の如く無理なる授業をなすかと云うことに就いては或いは法令の結果等に原因して居ると云うことも言えるかも知れぬ。… [略] …併し一面に於て法令は生徒の心的発達の状態に応じて、適當なる教育をなすことをも要求して居るのである。授業は常に生徒の発育を標準とするのは原則であるとも云うてもよい。然るに今日教授者は或いは法令の規定を標準として生徒の心的発育に応じて無理のなき適當なる教育をなすと云うことを忘れて居る傾きがあるかと思うのである⁽³⁶⁾。」

以上の考察に照らしてみれば、澤柳が、論文「デューウィ教育學說の研究を讀む」(1921年2月1日)第「七」節の冒頭で述べた永野の処女作への評価の言、

「私共の成城小学校は意識的にデューウィの意見によりて提擧されたものではないが、教育上の見当は大體一致していることを本書によりて明らかにするを得て心強く、我成城学校の教育に基礎づけ [を与え] られた感を禁ぜざるをえない。」

は、この論文を執筆した時点での、成城小学校教育実践の前提にある澤柳の「教育の発育観」と、永野の著作『デューウィ教育學說の研究』に説明されているデューイの「生長」としての教育観とが、「教育上の見当は大體一致していることを」「明らかにするを得て心強く」感じた、ということの意味する。そしてそれ故に、

永野の著作に示されたデューイの教育思想(特に「生長」概念)は、「我が成城校の教育に基礎づけ[を与え]られた感を禁ぜざるをえない」ということを意味する、と私は解する。成城小学校教育実践を指導する澤柳の「発育」概念と、『デューウィ教育学説の研究』原稿に示された永野の「デューウィ生長」概念とは、いわば、共振作用を起こしているのである。この共振作用を永野の側から見れば、「私の中のデューイが[澤柳]先生に似ている」と表現され、これを澤柳の側から見れば「教育上の見当は大体一致していることを本書によりて明にするを得て心強く、我が成城校の教育に基礎づけられた感を禁ぜざるを得ない。」と表現されることになる。

以上、永野原稿『デューウィ教育学説の研究』(特に「デューウィ生長」概念)の影響に着目して、「発達」概念から「発育」概念への再構成を軸にした、澤柳の教育思想とその「実験」としての成城小学校教育実践、について概観した。

- (3) 木下竹次『学習原論』, 手塚岸衛『自由教育真義』(篠原助市「批判的教育学」に依拠する), における「発達」概念の欠如と両教育理論におけるこの欠如への対応

澤柳の教育思想の、教師論にもとづく『実際的教育学』と『学修論』との表裏一体の構造に変更を加え、『学修論』を「自由学習」論として確保しこれを教育論へと吸収・一元化する方向で成立する——もちろん、篠原助市の「批判的教育学」にもとづいて——のが、手塚岸衛『自由教育真義』1922年、である。他方、澤柳の教育思想のこの構造に逆の方向で変更を加え、「教授・訓練・養護に関する事柄を一括して、これを見童生徒の側面から見て学習と称し⁽³⁷⁾」て教育(学)論を再構成し、教師論も「学習指導」論および「環境整理」論として残し、これら両者を「学習論」へと吸収・一元化する方向で成立するのが、木下竹次『学習原論』1923年、である。この論変更において、澤柳の教育思想

の中核に位置する「発達」概念は、手塚・木下両教育理論においては、ともに除外されることになる。以下、説明する。

手塚において、「教育とは、自然を理性化し、人をその現に『ある』状態から『あるべき』『あらざるべからざる』状態に導く作用である⁽³⁸⁾。」この「自然の理性化」を行なうのは「児童」自身であるが、それを導くのは教師である。なぜ、児童による「自然の理性化」を教師が導きうるかといえ、自分の意識と他人の意識とが根本的に連続し、同一の法則に支配せらるるがゆえにすなわち人はその根基からして社会的なるがゆえに、一人の意志は他人の意志活動を誘起することができ、…[略]…他人をして、みずから同一の考え方、行い方、感じ方…[略]…に導き、…[略]…教育することができる。…[略]…児童がまさに始めんとする活動…[略]…が、他人によりてすでに完成せられたるを見るとき、みずからもこれを完成せんと力むる。完成の方向を疑問またはその他の方法によりて導き、児童の意識の合法的活動を促すこと、これが教育である⁽³⁹⁾」からである。それ故、「自由教育論」における教育方法(子どもによる「自然の理性化」を導く方法)は、子どもの側からいえば、「動向」(「知にまで行にまでの意志の振起」)・「構成」(「理性による雑多の統一、即ち知り行なうの活動」)・「反省」(「その[理性]による」活動に対する省察批判の作用)であるが、これを導く教師の側からいえば、「刺戟」・「暗示」・「批判」がそれぞれに対応する⁽⁴⁰⁾。この、子どもによる「自然の理性化」を千葉師範附属小「自由教育」のカリキュラムに具体化すると、各教科内における「自由」教育(「読方科」・地理科などにおける「学習書」の編纂・使用、「綴方話方科」における「自由選題法」, 「図画手工科」における「自由画」・「自由手工」など)、「生活訓育の実践」としての「学級自治会」および「自治集会」(低・中・高の各学年、および全校)の開催、「自由学習時」の特設(「児童をして教科並に学習所の随意選択をなし、教師指導の下に自由に学習せしむ」, 毎日午前

11時より正午まで一時限)、「自学室」の設置、などになる⁽⁴¹⁾。また、このような「自由教育」実践による子どもの「理性」の覚醒および伸長を前提にした、「児童の思惟生活」の「道づれ」ないし「伴侶」(「自学書」として、中島義一(1893-1933)『子ども哲学叢書』(全7編)(1924-1931年)があげられる⁽⁴²⁾)。尚、篠原は「心理学においても私は児童生活の上における価値実現の程度、理性活動の発達を發生的に研究する一種の発生心理学を切に希望します⁽⁴³⁾」と述べているが、「希望」にとどまり、実現していない(新カント派における「批判的方法」と「發生的方法」との峻別と後者の排撃による)。替わりに篠原が提示しているのは、「教育の根本原理としての弁証法」(『批判的教育学の問題』第8章所収)である。

他方、木下において、「教育」に替わり「学習」はこう定義される。「学習とは学習者自らが教師指導の下にある整理された環境の中にあってみずから機会を求め、みずから刺戟を与え、みずから目的と方法を定め、社会に依拠して社会的自我の向上と社会的文化の創造をはかっていく作用である⁽⁴⁴⁾。」それ故、子どもに対する教師の働きかけは「学習指導」(「学習は教師の指導の下で行われる」)と「環境整理」(「学習は整理された環境の内でも有効に行われる」)に限定される⁽⁴⁵⁾。従って、教育方法に替わり、「学習の形式」、すなわち、「質疑」と「解疑」[ともに、「知」(「理知の生活」)、「情」(「審美的生活」)、「意」(「道徳的生活」)、「信」(「宗教的生活」)の「四方面」あり]、および、「学習の順序」[「独自学習」(「自由」)から「相互学習」(「共同」)へ、そしてまた「独自学習」へ、のサイクル]が提示される⁽⁴⁶⁾。子どもの「発達」の問題は、木下『学習原論』においても位置を持たない。理論外において、学級担任教師が、原則として、6年間一貫して持ち上がることになっている⁽⁴⁷⁾ために、子どもひとりひとりの「学習」の軌跡が、当該教師の「頭の中」に蓄積されるにつれて、担任学級におけるそれぞれの子どもの「学習」の予測をなしうることが各

教師に想定されているからである。(例、『学習原論』「第12章 学習指導案」の「事前」の記入要項と「事後」の記入要項との区別とそれぞれの蓄積による「学級功程録」の作成。)

次節では、澤柳の成城小学校教育実践に関与することを通して、永野が、自らの「経験哲学」(「デューイの哲学」を中心とする)にもとづいて「新しい教育の諸事実」をいかに「基礎づけ」しようとしたかを概観し、当時の「改造思潮」に基ける新学校の主張と実際」に対する永野の分析と提言について検討してみよう。(未完)

<注>

本論文は、2007年10月21日、日本デューイ学会第51回研究大会(於、奈良女子大学文学部)において、「課題研究 デューイと奈良の教育」の提案者のひとりとして、「永野芳夫のデューイ研究と澤柳政太郎の成城小学校教育実践との関連性の解明を通して」というテーマで筆者が行なった発表原稿に、題名変更および加筆修正(第I・II・III節の論述内容について)を加え、新たに第IV・V節を書き加えたものである。

- (1) Cf. Barbara Levine, ed., *Works about John Dewey, 1886-1995*, Southern Illinois University Press, 1996. および、森章博『日本におけるジョン・デューイ思想研究の整理』秋桜社、1992年。1930年ころまでの英語圏における主なデューイ研究書としては、Sidney Hook, *The Metaphysics of Pragmatism*, 1927, Herman H. Horne, *The Democratic Philosophy of Education: Companion to Dewey's Democracy and Education*, 1932, および、デューイ生誕70年記念会でのスピーチを活字にした、*John Dewey: The Man and His Philosophy*, 1930. がある程度である。
- (2) 『成城学園教育研究所年報 別巻「教育問題研究」・「全人」・「教育問題研究」総目次、人名索引、執筆者別索引』成城学園教育研究所、昭和63年11月、pp.153-154.

- (3) 永野芳夫『経験哲学を基礎としての新しい教育論』モナス、1924年、表紙の裏で目次の前頁のはしがき(頁数なし)。
- (4) 「永野芳夫」(大槻春彦執筆)、中村元・武田清子監修『近代日本哲学思想家辞典』東京書籍、1972年、p.415。尚、引用文中[]内は、大浦猛(文責)「故永野芳夫博士略歴」、日本デューイ学会紀要第9号、1968年9月、p.2.によって補足した。また、大正大学設立時の永野の「職名」は、大浦猛による「略歴」どおり「講師」であることを、日本デューイ学会会員、滝沢和彦氏(大正大学)のご配慮により、確認することができた。記して謝意を表す。
- (5) 永野の著書、『デューイ哲学説の研究』1922年、および『デューイの哲学』中和書院、1946年、のそれぞれ巻末に、この8回にわたる「東京帝国大学に於ける公開講演要項」が収録されている。尚、雑誌『教育学術界』への永野の最初の論文4編の主題は、論文「現代教育思潮とプラグマティズム」同誌、第38巻第1号、1918(大正7)年10月1日、pp.73-78、論文「現代教育思潮とプラグマティズム」同誌、第38巻第2号、1918(大正7)年11月1日、pp.68-71、論文「将来の学校教育(上)」同誌、第38巻第3号、1918(大正7)年12月1日、pp.68-74、論文「将来の学校教育(下)」同誌、第38巻第5号、1919(大正8)年2月1日、pp.80-85、である。また、雑誌『教育問題研究』への永野の最初の論文3編の主題は、論文「労役としての教育を救へ」同誌、第4号、1920(大正9)年7月1日、pp.1-13、論文「感賞的生活としての教育を高調す」同誌、第5号、1920(大正9)年8月1日、pp.69-81、論文「教育改造の諸問題」同誌、第6号、1920(大正9)年9月1日、pp.1-12、である。
- (6) 永野芳夫『デューイの教育学』中和書院、1937年2月、「はしがき」、pp.1-2。
- (7) 永野『デューイ教育学説の研究』大同館書店、1920年10月、「はしがき」、p.6.の次の頁(頁数の記載なし)。
- (8) 同書、「はしがき」p.1。
- (9) 永野が大分師範での長田新の教え子であることは、長田の詳細な年譜を含む令息五郎氏の論文、長田五郎「長田新の平和教育論(1)」明星大学戦後教育史研究センター『戦後教育史研究』第12号、1998(平成10)年2月25日、p.5.を参照。また、長田が1918年から成城小学校の「研究顧問」を勤めることについては、北村和夫『大正期成城小学校における学校改造の理念と実際』成城学園沢柳研究会、1977年、p.30.を参照のこと。
- (10) 永野芳夫『デューイ教育思想の基本原理』春秋社、1950年4月、「はしがき」、pp.2-3。
- (11) 永野芳夫『新教育の方法論』中和書院、1949年2月、「はしがき」、p.3。
- (12) 永野、上掲『デューイ教育学説の研究』、「はしがき」、pp.3-6。永野は、献辞の三番目にあげた友枝に対しては、東京高師での「倫理の講義」にとどまらず、「ときにはお宅まで襲撃して腹藏なく教えていただいた」こと(従って、長田以外に友枝も、東京高等師範在学中の永野のデューイ研究について指導・助言した可能性は残るが、長田ほどの関わりようではない)、デューイ来日の折、(宿の新渡戸稲造邸まで連れて行き)直接「デューイに紹介していただいたこと」、本書の出版に際してデューイの写真をお借りしたこと、の礼が述べられる。また、四番目の土田について、永野は、「渾身の勢力をこめて自己の尊い哲学で社会を洗礼しようとする真面目の哲学者土田兄」と土田の「哲学」の実践に賛辞を呈したうえで、こう述べる。「この書の第一編となるはずであった『哲学の研究』の部を、かく御多忙であるにもかかわらず・・綿密に読んで下され、かつ幾多に有益な御注意と、さらに激励の與へられたことに対して、私は衷心の感謝をささげます。」しかしこの「哲学の研究」の部はまだ研究が不十分であるため、「この書の初めにつけ加えることはやめ」、「いますこし広く深く探ったのちにこ

のシリーズの第二巻か第三巻にしたい」と(Cf. 『デューウィ教育学説の研究』「はしがき」, pp.4-6)。永野のデューイ研究第一作の原稿についての土田の「幾多の有益な」 「注意」は、どうやら永野のデューイ研究第二作(『哲学の研究』の部)に生かされることになったようであるが、その詳細は不明である。ともあれ、東京帝国大学に入学してデューイ哲学を軸にして本格的に哲学を修めようとしていた永野が、日本における哲学の社会的役割の実践者として、第一に土田をあげ、自らの処女作の原稿を下読みしてもらっていた、という事実は、社会における哲学の役割についての永野の当初の展望を示す手がかりであり、興味深い。しかし、最近の詳細な土田杏村研究(参照、山口和弘『土田杏村の近代文化主義の見果てぬ夢』ぺりかん社、2004年)において永野は全く論及されていないので、この問題(社会における哲学の社会的役割についての永野の当初の展望とその後のその実践)については、今後の課題とした。

(13) 注(3)と同じ。尚、桑木巖翼について、永野は『デューイの教育学』にこう述べる。「大正十一年、『デューイ哲学説の研究』の出版直後に、桑木巖翼先生から、『杜威五大講演』といふ書^(マツ)を、借していただいた。杜威が支那でした五つの講演筆記の支那時文訳です。内容は第一社会哲学輿政治哲学、第二教育哲学、第三思想之派別、第四現代的三個哲學家、第五倫理講演紀略、附録初等教育(これはじつはデューイ夫人の講演)であった。この内容を見てどうしても読みたい。」云々。(同書「はしがき」p.2.)

(14) 永野、上掲『デューウィ教育学説の研究』「はしがき」, p.3.

(15) 澤柳政太郎「デューウィ教育学説の研究を読む」『教育問題研究』第11号、1921(大正10)年2月1日、p.101. 尚、澤柳のこの論文(永野の処女作の紹介論文)が収録されている、国土社版、『澤柳政太郎全集4 初等教育の

改造』, pp.242-246. では、表題が『『デューウィ教育学説の研究』を読む』に変更されている。「永野芳夫の著書への書評であることを明らかにするため、原題には無かった『 』を付した。」との理由からである(同書、p.496)。変更はそればかりではない。永野の処女作への澤柳の評価を示した、第「七」節全体が欠落しているのである。もちろん、欠落の理由は何も示されていない。澤柳の論文の表題に「添削」を加えるほどの明確な編集意識が編集者側にあるのであるから、そして原文の第五・六節と第七節とは見開きのページに印刷されている(全文をコピーしても、第一・二・三・四節でA4版1枚、第四節(続き)・第五・六・七節でA4版もう1枚、計A4版2枚である)のであるから、この第「七」節のみの欠落は、編集者側の単なる「うっかりミス」であるとは到底考えられない。そもそも、澤柳は書名にいつも『 』を付ける習慣を有してはいないのである。例えば、『實際的教育学』同文館、1909年2月、における、「谷本[富]教授は其新著系統的新教育學に於て」云々、「森岡[常蔵]教授の…[略]…教育学精義全篇を通覽するに」云々、の用例を参照せよ(同書、pp.4, 6-7.)。尚、国土社版、『澤柳政太郎全集1 實際的教育学』ではこれらの書名に『 』を付する「添削」は行っていないから、この澤柳論文の表題変更(書名だから、との理由もとづく、表題への『 』の付与)は、そしてなおさら第「七」節の欠落は、あまりにも奇々怪々であり、理解に苦しむ。

ともあれ、国土社版『澤柳政太郎全集4 初等教育の改造』における澤柳論文「デューウィ教育学説の研究を読む」の第「七」節の欠落は、澤柳政太郎の教育思想と成城小学校教育実践に関する先行研究において、永野芳夫が『教育問題研究』に計18編もの論文を掲載している——『教育問題研究』への永野の最終寄稿(第51号)まででいうと、永野の同誌への掲載数は、長田新の掲載数15編を上回

る——にもかかわらず、澤柳と成城小学校教育実践に果たした長田の役割は澤柳研究の一環として研究されている(例、中野光『日本のペスタロッチーたち』つなん出版、2005年、第三部「一、ペスタロッチーを学んだ二人の教育学者—澤柳政太郎・長田新における出会いと継承—」, pp.128-159.)のに比して、研究上著しく不公平な取り扱い(澤柳と成城小学校教育実践に果たした永野の役割については、研究が皆無であること)をもたらししている。このことは、澤柳政太郎の教育思想と行動(特に、成城小学校教育実践)の研究にとって、ひとつの大きな障害要因となっているだけではない。この澤柳論文における永野処女作への評価を示した第「七」節の欠落は、日本における大正期から昭和初期にかけてのデューイ研究のありよう(それ故、戦後日本におけるデューイ研究との関連性のありよう)の解明においても大きな盲点をもたらし、この盲点に起因する教育認識上の著しいゆがみを我々にもたらししている(例、中野光は、論文「大正自由教育とデューイ——『日本のデューイ』と——」日本デューイ学会紀要第21号、1980年6月、pp.119-124.において、「『日本のデューイ』と——いい教育者たち」として、澤柳政太郎・西山哲治・及川平治の3名をあげているが、それ以前にまず第一に、永野芳夫をこそ、「日本のデューイ」として取り上げるべきであったのである)。戦前の永野のデューイ研究のありようを、澤柳政太郎の指導する成城小学校教育実践への永野自身の関与との関連において究明することによって、このような研究上の盲点とこの盲点に起因する教育認識上の著しいゆがみは、是正されねばならない。

尚、本論文の第III節の論述は、大浦猛「澤柳政太郎とデューイ教育学」(1974年12月16日、於、成城学園初等学校応接室)『澤柳政太郎研究』第30号、1975.6.20、pp.1-48.への批判であり、代案提示である。大浦は、「澤柳政太郎の教育学」と「デューイ思想と

の関係」についてこう述べる。すなわち、澤柳は「明治23年、4年の頃今の東洋大学の前身たる哲学館に於いて講師として心理学を担当した時」初期デューイが1886年に著した「ヘーゲル派の立場からのサイコロジ」を「種本」とした、と述べてはいるが、その後の「デューイの新しい教育学の立場にたっている書物を、澤柳さんは読んでおられないというふうに、私は判断いたしております。／そう判断いたしますが、叙述の内容を見ますと、考え方は似ているところはあります。つまりデューイの原書を読み、デューイの理論をきちんと本格的に勉強した上で、似ているのではない。結果として類似している」(同論文、pp.22-23.)、と。そして、「沢柳さんの『実際の教育学』が出版される直前で言えば、心理学を基礎とする科学的教育学の代表的な例は、実験的教育学でした。…[略]…[ライや日本人の手による]実験的教育学の大運動を意識し、それに拮抗する心算でその、沢柳さんは発言したのです」(同論文、p.32.)、と。以上の大浦の言は的確である、と私は考える。しかし大浦は、「昭和2年6月に行なわれた『本当の教育』と題する講演の一節[「成城小学校の教室の有様は、一見雑然としています。児童は可なり盛んに私語しています。」云々の箇所]は、きわめて明瞭に、確実にデューイの『学校と社会』からとられております。…[略]…／…[略]…／沢柳さんは、…[略]…『学校と社会』の観念を、成城の中にかかしてあります。」(同論文、pp.24-25.)、と断定する。この、「沢柳政太郎の教育学」と「デューイ思想との関係」についての大浦の断定は恣意的であり、的はずれな指摘であると私は考える。その理由は第一に、沢柳が、『実際の教育学』において提示した教育実践上の諸問題を、教師の「実験」を通して研究し解決するために、成城小学校を創設しそこで教育実践を行なっている、ということ、大浦は理解できていない、と考えられることである。大浦は言う。「沢柳さんの

『実際的教育学』の末尾に、こういう言葉が述べられています。… [略] …「本書において単に問題として挙示したるに止まるものの内、余はその解決として提出せんと欲するものも少なくはない。これはさらに他日を以て世に問いたいと思う。」と。この「他日を以て世に問いたい」とされたことは、その後何らかの形で表明されているのでしょうか。これは私が先生方にお尋ねしたい点なんです。それとも、そのことは全くなされずに終わったのでしょうか。… [略] …そのことをいわば問題として提出したいと思います。もしお教えいただければ、ありがたいことと、存じます。」(同論文, pp.32-33.) 理由の第二は、「沢柳政太郎の教育学」と「デューイ思想との関係」(特に両者の「結果としての類似」性)について、問題は、成城小学校教育実践の前提にある澤柳の教育観と、永野の原稿「デューイ教育学説の研究」に示された「デューイ教育学説」との、「結果としての類似」性がどこに見られるか、ということである。しかし、大浦は、「[澤柳が]「デューイ教育学説の研究を読む」の[第七節]中では、「成城小学校は意識的にデューイの意見に」よったものではないが、「教育上の見当は大體一致していることを本書によりて明にするを得て心強く、我が成城校の教育に基礎づけられた感を禁ぜざるを得ない。」とまで、述べているのです。」(同論文, p.25.) と、永野『デューイ教育学説の研究』への澤柳評価の肝心要の箇所を澤柳論文「デューイ教育学説の研究を読む」第七節から引用している(従って、この『沢柳政太郎研究』を主催した、国土社版澤柳全集の編集者たちは、澤柳論文「デューイ教育学説の研究を読む」の、第七節を含む全文(コピー)を既に所持し、大浦にそのコピーを講演前に送付していた、ということになる)。しかるに、「沢柳政太郎の教育学」と永野原稿「デューイ教育学説の研究」に示された「デューイ教育学説」とが、どこにおいて、「教育上の見当は

大體一致している」のか、大浦は何も検討していない。この検討に代えて、大浦は、上述の、澤柳による、「きわめて明瞭」・「確実」な『学校と社会』からの引用、に論及しているのである。そして理由の第三は、講演後の質疑応答において、「『児童中心主義の教育』に収められて「小学教育」という[澤柳の]講演記録があります。その第三節の「小学教育の諸問題」がとくにそうです。… [略] …『実際的教育学』の中で「教育は発達である」ということを、自ら点々を打ちながら、かなり強調している。「小学教育」の講演記録でも「教育は生長であるということは大分認められるに至った」と[澤柳は]おっしゃってもいる。そここのところは、デューイの教育思想というもののとの関連があるのか、[澤柳は]なぜああいう教育観を表明したのであろうか、という疑問があるんですけども」(庄司和晃)との質問(もう二回繰り返される)に対して、大浦は、「とくにデューイとだけ結びつける必要はない」、「デューイは、著書の一節に「成長としての教育」という見出しをつけ、成長・発達を助けるいとなみとして教育をとらえていますので、沢柳さんの考えと似ております。沢柳さんが、限りなき発達を説き、固定的・究極的目的を言おうとしないところも、デューイ的でしょう。ただ、それだけのことで、その点が、デューイに由来する、と断定しかねているのです。」(同論文, pp.38-41.) と、かたくななまでに、澤柳の「生長」としての教育観と永野原稿「デューイ教育学説の研究」に示される「デューイの教育思想」との「関連」性についての検討および論及を、拒んでいることである。

(16) 澤柳政太郎『実際的教育学』同文館、1909(明治42)年2月, p.311.

(17) 澤柳政太郎『教師及校長論』所収の「附録 第二 ベスタロッチ。教育者は皆ベスタロッチたるを得べし」(初出は『教育者の精神』1895年), 同文館、1908(明治41)年11月, p.419.

- (18) 澤柳, 『教師及校長論』, pp.203-204. 尚, 澤柳は, のちに1921~22年の欧米教育視察においてアメリカ合衆国を訪れ, ヘレン・パークーストのドルトン・プランの試みに, 教室を「実験室」とみなす自らの教育実践研究論との非常な類似性を見出し, 彼女を1924年日本に招聘することになる。パークーストのドルトン・プランについては, 宮本健市郎『アメリカ進歩主義教授理論の形成過程 教育における個性尊重は何を意味してきたか』東信堂, 2005年, を参照のこと。
- (19) 澤柳, 上掲『教師及校長論』, p.101.
- (20) 澤柳, 『実際の教育学』, pp.88-89.
- (21) 澤柳政太郎「実際の教育学に就て(山田氏に答ふ)」『教育界』第9巻第1号, 1909(明治42)年11月3日, p.42.
- (22) 澤柳, 『実際の教育学』, p.92.
- (23) 同書, p.213.
- (24) 同書, p.29.
- (25) 澤柳政太郎, 『学修法』, 『澤柳政太郎全集 2 修養と教育』国土社, 1977年10月, pp.57, 57, 58.
- (26) 澤柳, 同上書, pp.64, 62.
- (27) 同書, p.61.
- (28) 同書, pp.71-72.
- (29) 同書, pp.72-73, 61.
- (30) 澤柳政太郎「教育の発育観と器械観」『教育問題研究』第5号, 1920年8月1日, 『澤柳政太郎全集 4 初等教育の改造』国土社, 1979年2月, pp.201-202.
- (31) 澤柳政太郎「自学自習法の建設にまで」『小学校』第30巻第5号, 1920年11月20日, 上掲『澤柳政太郎全集 4 初等教育の改造』, pp.225-230.
- (32) 澤柳礼次郎『吾父 澤柳政太郎』1937(昭和12)年10月, 『伝記叢書 3』大空社, 1987(昭和62)年9月, p.135. 尚、新田義之『澤柳政太郎一随時随所楽シマザルナシー』ミネルヴァ書房, 2006年, pp.125-126. も参照のこと。
- (33) 澤柳政太郎「教室内の教授をして快活ならしむる方法如何」『教育学術界』第26巻第2号, 1912(大正元)年10月15日, 上掲『澤柳政太郎全集 4 初等教育の改造』, pp.32-39.
- (34) 永野芳夫『デューウィ教育学説の研究』大同館書店, 1920年10月, pp.38-39.
- (35) 澤柳政太郎『学修法』, 上掲『澤柳政太郎全集 2 修養と教育』, pp.69-71.
- (36) 澤柳, 「教室内の教授をして快活ならしむる方法如何」, 上掲『澤柳政太郎全集 2 修養と教育』, p.38.
- (37) 木下竹次『学習原論』目黒書店, 大正13年(20版), pp.8-9.
- (38) 手塚岸衛『自由教育真義』宣文堂復刻版, 『千葉師範附小・自由教育1』所収, 1974年, p.75.
- (39) 篠原助市『批判的教育学の問題』東京寶文館, 大正13年(5版), pp.91-92.
- (40) 手塚岸衛, 前掲書, p.149.
- (41) 同書, 「後編 教育實際」の「一 教育要覧」, pp.170-198.
- (42) Cf. 米澤正雄編『中島義一著作集 3 こども認識論 林檎の味』紫峰図書, 2003年。尚、中島の『こども哲学叢書』は次の通りである。『第一編 こども認識論 林檎の味』1924年12月, 『第二編 こども倫理学 バベルの塔』1925年6月, 『第三編 こども論理学 プロメトイアの火』1927年11月, 『第四編 こども美学 橄欖の花』1929年8月, 『第五編 こども心理学 自由の翼』1930年7月, 『第六編 こども宗教論 ヨルダンの流』1931年10月, 『第七編 こども人生論 スフィンクスの謎』1931年11月, とともに, 文教書院, 刊。
- (43) 篠原助市, 前掲書, p.280.
- (44) 木下, 前掲書, p.15.
- (45) 同書, pp.9-11.
- (46) 同書, 第8章および第9章参照。
- (47) 鈴木明哲『大正自由教育における体育に関する歴史的研究』風間書房, 2007年, p.548.